

大規模酪農場における口蹄疫防疫計画の見直し

紀南家畜保健衛生所
○宮本泰成 小谷 茂

【背景および目的】

口蹄疫は平成22年に宮崎県で発生し、多大な経済被害を引き起こしたのを最後に現在まで国内での発生はない。しかし周辺国である中国、韓国、モンゴル、ロシアでは今年に入ってからはもちろんのこと、ここ数年散発もしくは続発的に発生しており、国内にウイルスが侵入するリスクが高い状況が続いている（図1）。当所でも万が一の発生に備え、口蹄疫に関する防疫計画は作成してしたが、その更新頻度や市町村、振興局などの関係機関への周知は不十分だった。そこで平成29年度に管内の大規模酪農場をモデルに関係機関と連携しながら、防疫計画の見直しを実施した。牛舎構造や土地、施設の使用可能状況が年々変化してきたこともあり、殺処分作業導線、埋却地、消毒ポイント、検診場所、資材置き場等が主な見直し点となった。関係機関と協議や検討を重ねた結果、平成29年度内に概ね見直しは完了し、これをもとに振興局にて東牟婁地域口蹄疫対応マニュアル（以下マニュアル）が制定され、口蹄疫防疫演習等で活用された（図2、3）。しかし、このマニュアルだけでは作業の概略はわかるが、具体的な詳細はわからないとの意見も出た。そこで今年度、再度関係機関と協議、新たに現場研修を実施し、作業の具体化、詳細化に向けた取り組みを開始した。

【協議、現場研修】

まず平成30年5月に市町村及びマニュアルに記載されている全業務班（地域振興班、建設班、健康福祉班、農林水産振興班）を参集し、平成29年度の取り組み、今年度の取り組み等について説明を実施し、市町村、各班から理解を得た。また人事異動によりマニュアルを知らない職員も増加したため、地域振興班へ職員ポータルサイトへの掲載を依頼した。以降は各班と個別に協議、現場研修を実施した。平成30年7月に建設班とは消毒ポイントの場所、設置、運営について、建設業協会とのやりとり、資材置き場の場所等について協議を実施した。埋却作業については建設業者の意見があった方がいいとのことだったので、後述するが、後日建設業者を交えた協議を実施している。健康福祉班とは平成30年8月に、実際の検診予定場所で設置、運営、検診者の導線等について協議を実施し、こちらも検診場所レイアウトや問診票の作成等の課題が得られた。農林水産振興班とは平成30年9月に実際に農場にて殺処分作業、牛の運搬、積み込み作業や導線についての確認等に加え、発生時防疫措置完了

までの時間に大きな影響を与えるであろう牛の扱い、特に保定や追い込みに関する現場研修を実施した。こちらについても現地集合場所の再選定や牛の扱いに不慣れな職員が多く、作業に想定以上の時間がかかる等課題が得られた。前述した建設業者とは平成30年10月に、埋却場所、埋却作業、重機について、また重機を使用する殺処分牛の積み込み作業について協議を実施した。埋却については選定した候補地に来てもらい、埋却面積、重機の侵入等大きな問題はないとの意見を得たが、殺処分牛の積み込み作業については当所が想定している以上に時間がかかるのではとの指摘があった。建設業者より11tダンプの貸出しが可能とのことだったので、平成30年11月に建設業者協力のもと、殺処分牛を11tダンプに積み込む想定の現場研修を、関係機関を参集し実施した。ダンプ荷台にブルーシートを広げ、殺処分牛に見立てた土砂を投入、シート余剰分で包むといった作業の一連の流れを実施した（図4）。当日は時間、土砂の量の関係上ホイールローダー2杯分（およそ牛2頭分）しか載せず、建設業者の手伝いを受けても、作業完了まで約20分かかり、実際には5頭/台程度載せる予定であり、想定以上の時間がかかることが示唆された。

【課題への対応、今後】

建設班との協議で得られた課題への対応として、消毒ポイントの再選定については完了し、建設業協会への作業説明は今後実施する予定、資材置き場の再選定については市町村に他の候補地がないか検討を依頼している。健康福祉班での課題については、検診場所レイアウト、問診票の作成を健康福祉班へ依頼している。農林水産振興班での課題については、現地集合場所の再選定は完了し、牛の扱いについては定期的な現場研修の開催、殺処分牛の積み込み作業については人員の変更等防疫計画の再度見直しで対応していく。なお今回の協議や現場研修の内容、得られた課題等については今年度中に再度全体会議を実施し、報告、意見交換を実施する予定である。

口蹄疫発生時に迅速な対応を行うためには、防疫計画を随時見直し、より具体的かつ詳細な内容とすることが重要である。そのためにも今後も他農場を含め、今回のような取り組みを継続していく。